熊本県中山間農業モデル地区支援事業事例集

⑪泉町西部地区（八代市）

いずみ茶を将来へ引き継ぐために
～いずみ茶のために 今すべきこと～

ビジョン策定年度：平成30年度　目標年度：令和4年度

いずみ茶を将来へ引き継ぐために　～いずみ茶のために 今すべきこと～

泉町西部地区（八代市）

ビジョン策定年度：平成30年度　目標年度：令和4年度

1．モデル地区のプロフィールと現状

（平成29年度）

◆農業者に関する状況

・総戸数	685戸	住民基本台帳
・総人口	1,672人	住民基本台帳
・農家戸数	82戸	2015農林業センサス
・農業者数	82人	2015農林業センサス
・担い手数	10人	
・65歳以上の農業者数	48人	2015農林業センサス

◆農地に関する状況

（1）面積区分

・水田	54.3ha	H26固定資産台帳
・畑(樹園地除く)	135.5ha	H26固定資産台帳

（2）作付区分

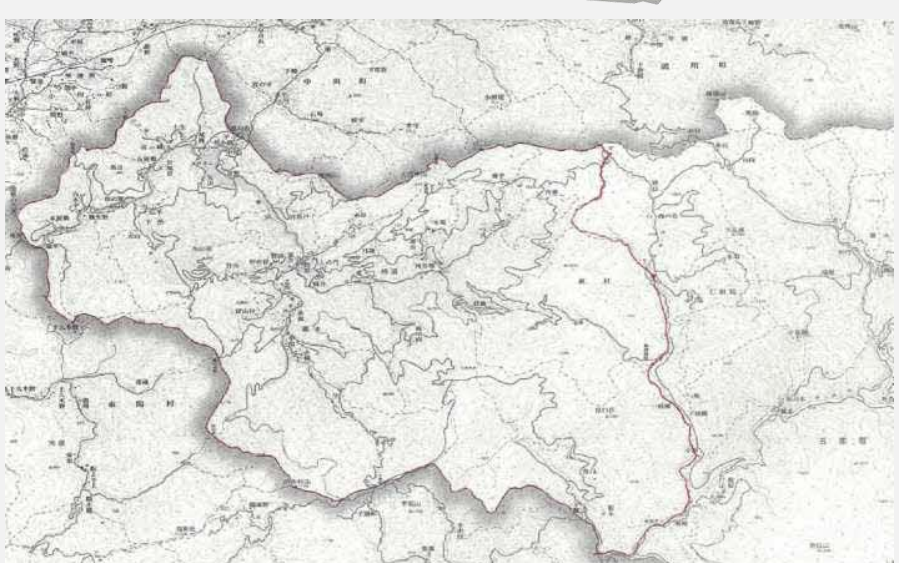
・水田	水稲
・畑（樹園地除く）	茶

◆基盤整備に関する状況

（1）ほ場整備	ほ場整備未実施
（2）耕作道路	幅員が2.0m未満、未舗装
（3）排水	土水路
（4）用水	河川水をポリタンクに汲み上げ、運搬して取水

◆集落の現状

〇地区の農業者は65歳以上が約6割である。
〇82戸のうち担い手は10戸しかおらず、兼業農家が34戸、うち第2種兼業農家が41戸であり、担い手不足が顕著である。
〇1戸あたりの経営規模が小さく、収益が上がらない。(1ha未満の農家が占める割合73.2%)
〇茶農家の離農が増加しており、遊休農地が散見される。
〇上記の現状を打破すべく、地区内の若手茶農家が茶園の再編に向けての話し合い活動及び茶園の状況調査を始めている。



2. ビジョン策定のプロセス

（1）ビジョン検討のスタートに向けて

八代市への合併前から、泉の茶業の中核的となる組織「泉町茶業振興協議会」を作っていた。50年ほど前に設立し、以前から茶業のまとまりはあった。県から市に中山間農業モデル地区支援事業の話が来て、市から泉地区に話がきた。茶業振興協議会全員で集まり、当事業の活用について話し合いを行った結果、3地区（広平、野添、古園）を選定し活用することを決定。泉48地区のうちこの3地区は、後継者がいるか、または茶業で成果を挙げている地区。将来的にも継続的に茶業が続くことが見込まれる地区を選定した。

（2）泉町茶業振興協議会と協力体制

中山間農業モデル地区支援事業の核となるのは泉町茶業振興協議会のメンバー。会員21名・100%茶業の農家。泉町茶業振興協議会の会長が、当事業に該当する地区と行政との窓口になり、協議会全員で動いている。会員21人のうち若手後継者は30代男性2人。40～50代が3人。ほかは60歳以上である。

選定地区以外からの反対はなかった。泉町茶業振興協議会は特に70歳以上の会員が多く、後継者もいないため「茶業を継続的に続けている地区、後継者がいる地区（広平、野添、古園）を中心に活用したほうがいい」という意見が多かった。後継者がいる地区を当事業で活性化させ、泉のモデル地区となり、このことが将来的には泉全体の茶業・景観を守ることに繋がると話し合い、協力してもらった。よって合意形成はスムーズだった。

（3）ビジョン検討の経緯

泉町茶業振興協議会のメンバーで計16回の会議を行った。同時に、現地調査も行った。同じ茶業を主体とした地区で当事業のモデル地区となっている岳間にて、視察研修を行った。協議を重ね、該当地区の現場で意思統一を図っていった。特に作業道の整備については茶業以外の土地も含まれるため、慎重に話し合いを重ねていった。

（4）ビジョンの合意形成

当事業の活用は「茶業を継続的に行える地区を重点的にしよう」という意見が多かった。そのため合意形成はスムーズだった。

ただし、1地区については茶業振興協議会以外の農家（水田など）も含まれる。川向かいにある茶園のために作業道整備の計画をしたが、計画区域に茶業以外の農地があるため実施できない箇所があった。そのため道幅拡大ではなく小規模整備をした。分散錯圃（ぶんさんさくほ）のため、これからの作業道の整備については、土地所有者と話し合いを行うなど、継続進行中である。

H29.11.16　検討会

H30.3.12　検討会

いずみ茶を将来へ引き継ぐために　～いずみ茶のために 今すべきこと～

泉町西部地区（八代市）

ビジョン策定年度：平成30年度　目標年度：令和4年度

H30.3.1岳間視察研修（ほっと岳間）

H30.3.1岳間製茶圃場基盤整備状況視察

H30.8.20　集落別会議（広平）

H30.8.27　野添地区現地検討状況

H30.8.30　広平地区現地検討状況

H30.8.30　広平地区現地検討状況

◆モデル地区農業ビジョンの検討の流れ

番号	日付	場所	話し合いの内容	参加人数
1	H29.10.5	八代市東陽支所	茶園再編及び転換作物導入に向けた打ち合わせ	5名
2	H29.10.26	八代市本庁仮庁舎	モデル地区のビジョン作成についての打ち合わせ	8名
3	H29.11.6	熊本県県南広域本部	PT会議	9名
4	H29.11.16	八代市泉支所	茶園の方向性及びビジョン作成に向けた打ち合わせ	9名
5	H29.12.4	八代市泉支所	茶園の方向性及びビジョン作成に向けた打ち合わせ	14名
6	H29.12.20～ H30.3.15	現地（泉地区内茶圃場）	茶園の状況把握（現地） 検討員が優良茶園、廃園相当の茶園を区分。	5名
7	H30.1.15	八代市泉支所	茶園の方向性及びビジョン作成に向けた打ち合わせ	12名
8	H30.2.21	八代市泉支所	茶園の方向性及びビジョン作成に向けた打ち合わせ	10名
9	H30.3.1	山鹿市鹿北町岳間地区	先進地視察研修 茶生産の分担、工場の再編について研修	17名
10	H30.3.12	八代市泉支所	茶園の方向性及びビジョン作成に向けた打ち合わせ	13名
11	H30.7.3	八代市東陽支所	事務局・会長打ち合わせ	10名
12	H30.7.17	八代市泉支所	全体会議	15名
13	H30.8.20	広平公民館	集落ごとのビジョン策定会議（広平地区）	13名
14	H30.8.27	八代市泉支所・野添地区（現地）	集落ごとのビジョン策定会議（野添地区）	9名
15	H30.8.30	広平地区（現地）	現地検討会	9名
16	H30.9.4	古園公民館	集落ごとのビジョン策定会議（古園地区）	13名
17	H30.9.12	八代市泉支所	ビジョン策定会議	13名

3. 集落の「課題」と「将来像」

◆集落の課題

○農業への魅力が感じられず、都市部から遠いこともあり、若者が地域から離れていく。
○生産農家の減少、生産規模の縮小による特産品・茶の販売力の低下。
○茶工場が老朽化し、機械の更新が必要だが、負担が大きく更新が困難。
○茶園の分散錯圃のため、農作業の効率が悪い。
○植え付け後、数十年が経過している茶が多く、改植が必要であるが、費用面、作業面での負担が大きく、困難となっている。
○集落機能が低下し、集落が存続できなくなる。

◆集落の目指す将来像

○地区外の加工所等と連携し、地域の特産品を新たに開発し、販路を開拓している。
○優良茶園を担い手に集積する。集積にあたっては、分散錯圃を解消させ、作業を効率化している。
○ほ場条件が悪いなど、条件の不利な茶園については、ヒバ、柚子などの農作業の負担が小さい作物に転換し、農作業の負担軽減を図る。
○生産、製茶、販売を一括して行なう農家、生葉農家、製茶のみを行なう農家、作業受託農家に分業化し、作業効率を向上させ及び生産コストを縮減している。
○地区外から担い手を受け入れている。

◆成果目標

○転換作物を導入し所得の確保を図る。
○茶栽培を再編し、集約化、規模拡大による所得の確保およびコスト削減を図る。

（1）課題認識への変化はあるか

◆解決へ向けての進捗

作業軽減・景観維持、また後継者のためにも作業道路の確保（道路整備）を優先的に進めている。

農地の区画整備については、各農家との話し合いを続けている。

茶業を主軸にしながら、柚子やヒバなど枝ものへの作物転換を進め、所得確保と景観維持、担い手確保に繋げていく予定。

◆あらたな課題

区画拡大については継続検討中である。分散錯圃・勾配差のため区画整備の着手が難しい。引き続き各農家との話し合いを重ねていく。

今後、他の事業などを活用しながら具体的に進めていく予定。

（2）将来像に修正は必要か

茶業界は、需要の変化など現在転換期にあるため、毎年計画の見直しをしていく必要がある。

茶工場の再編には多額な費用がかかるため、当事業では着手できないが、今後計画していく予定。

4. 取り組み状況

［ビジョンの内容］

（1）基盤整備などの実施

◆作業道を整備し、高齢化が進んでいる当地区での農作業の負担軽減を図る。（区画拡大、石積み補修等の関連事業を含む）
◆作業道の整備が困難な部分についてはモノレール等の整備により作業効率の向上を図る。

（2）機械の共同利用化

◆摘採機等を導入し、共同利用を図り、農作業の負担軽減を図るとともに、出荷作業の一元化を行い、コスト削減を図る。
◆軽剪枝機等の導入により樹形を変更することで、収量増を図る。

（3）茶工場の再編

◆国の補助事業等を活用し、茶工場に機械を導入し共同化、もしくは大規模化を図り、茶生産、出荷の分業化を図る。

（4）改植の実施

◆国の補助事業等を活用し、茶の改植を行い、生産量、品質の向上を図る。
◆小規模な改植についてはバックホーを導入し、自力施工を行う。

（5）転換作物（柚子、ヒバ、トウガラシ等）導入の検討（地区外との加工連携を含む）

◆バックホーアタッチメント等の導入により廃園する茶園の伐根を行い、他品目の作付けを検討し、景観の維持を図る。伐根した茶はたい肥化等によるコスト削減を図る。
◆茶から転換した作物は、地域外の加工所と連携し、販路拡大を図る。

［各項目の取り組み状況］

（1）基盤整備などの実施について

◆取り組みの状況と成果

［作業道］

広平地区の作業道を拡大整備。平成30年度は680m、令和元年度は50mを施工完了。野添地区も令和元年度までに70m施工する。

耕作道路整備前（広平）

耕作道路整備後（広平）

耕作道路整備前（広平）

耕作道路整備後（広平）

［区画拡大］
継続検討中。分散錯圃・勾配差のため区画整備が難しい。茶業以外の土地もあるため、引き続き各農家との話し合いをしていく。土地を荒らさないためにも必ず実現していかなくてはならない。今後、他の事業などを活用しながら進めていく予定。

［石積み補修］
平成30年度に190㎡、令和元年度に100 ㎡の修復を行った。

耕作道路整備前（広平）

耕作道路整備後（広平）

［モノレール設置］
モノレール設置を検討していたが、協議会で話し合った結果、モノレールは管理・維持費の問題が出てくるため、道路整備に見直しを行った。

◆解決すべき課題
農地の区画拡大については勾配差があるため費用がかかる。また分散錯圃のため、区画拡大・耕作道路整備については今後も、茶業以外の土地との話し合いを進めていかなくてはならない。

◆今後の方針
道路整備を引き続き行う。まずは作業道の整備を最優先し、作業効率化・景観維持を目指す。

（2）機械の共同利用化について

◆取り組みの状況と成果
摘採機等を令和元年度までに12台導入（深狩り・化粧狩り2セット、摘採機3セット、本中狩り機1台）。
現在、茶の摘採はR3000（茶畝上面の曲率）仕立てが主流になっており、摘採機を徐々にR3000に変更中である。今後はさらに高齢化が進み、作業の効率化を目指していかなくてならず、そのためには大型機械・摘採機械に適応するほ場を作っておく必要がある。R3000については、農作業の軽減とまではいかないが、試験場で収量が何割か増えるという結果が出ている。R3000の導入で生産性向上を図る予定。後継者がいる茶園農家1戸で平成30年度からR3000の使用を開始。今後も2戸使用開始予定。

◆解決すべき課題と今後の方針
R3000の導入には、防霜ファンの完備が必須である。防霜ファンが整っていない茶園での導入は、霜にあたる確率が高くなるため、R3000の導入は施設が整っているところからスタートする。また、従来のかまぼこ形からR3000に成形すると、当面は収量が減少するため、成果は2、3年後となる予定。

摘採機による茶の摘採作業

（3）茶工場の再編について

◆取り組みの状況と成果

継続的に検討中。現在、各戸で茶の栽培から加工までをしているが、どの茶工場も機械が老朽化している。高齢化も伴い、機械の耐久がなくなったところで茶業を畳む農家も多くなっている。そのためにも茶工場を集約・再編していく必要がある。いずみ茶の生き残りを目指すためにも共同化を進めていく予定。

◆解決すべき課題と今後の方針

茶工場再編には億単位の費用がかかるため、計画はあるが具体的には進行していない。今後、国の事業などを活用し、継続的に検討していく 。

茶工場の機械

（4）改植の実施について

◆取り組みの状況と成果

継続的に検討中。今後、茶品種を考慮しつつ植え替えを行う予定。
当事業でウッドチッパーを購入。茶を抜根して粉砕し、たい肥として再活用する。現在、数軒の農家でウッドチッパーを利用した土壌改良を行っている。抜根した農地は、他の作物の作付けを進めている。

また、基盤整備、道路拡張、茶の抜根などに利用できるバックホーの導入を検討している。オペレーターは協議会のメンバーが担当する。

◆解決すべき課題と今後の方針

耕作放棄地については、景観維持の意味でも、ほ場条件が悪い農地や道路から見渡せる農地を優先的に、ヒバや柚子などの作物に転換していく話し合いを進めている。

ウッドチッパー（古園）

バックホーアタッチメント（古園）

（5）転換作物導入の検討について

◆取り組みの状況と成果

柚子、ヒバ、切り花などの枝もの作物への転換を進行中。

令和元年度までに、柚子は5ha、ヒバは20haを転換作物として作付けを実施。ヒバについては現在、鹿児島では需要に生産が追い付かない状態であり、泉地区に生産依頼が来ている。今後も枝ものへの転換を進めていく予定。

◆解決すべき課題と今後の方針

ビジョン策定時から現在までの2年間で、茶の需要や価格に変化があった。需要減少・価格低下傾向にあるため、需要のある他の作物への転換を今後も進めていく。

泉地区は複合形の作付けができることが強みである。茶のほかにも需要のある作物を複合で行えば、いずみ茶も活性化するのではないか。新しい作物の作付けのためにも、最優先課題として作業道の確保、区画拡大、機械化を進めていく。

ヒバの作付け

柚子の作付け

5. まとめ：成果と今後の展開方向

◆成果目標

・転換作物を導入し所得の確保を図る。
・茶栽培を再編し、集約化、規模拡大による所得の確保およびコスト削減を図る。

（1）全体的な成果

**①作業道の拡大整備、石積み補修は順調に伸長。
ただし、区画拡大については継続検討中。**

［作業道］
広平地区の作業道を拡大整備。平成30年度は680m、令和元年度は50mを施工完了。野添地区も令和元年度までに70m施工する。

［区画拡大］
継続検討中。分散錯圃・勾配差のため区画整備が難しい。引き続き話し合いが必要。今後、他の事業などを活用しながら進めていく予定。

［石積み補修］
平成30年度に190㎡、令和元年度に100㎡の修復を実施。

②機械の共同利用は、12台導入。

摘採機等を令和元年度までに12台導入。現在、後継者がいる区画で運用中。

③転換作物導入を進行中。ゆず5ha、ヒバ20haの作付を実施。

柚子、ヒバ、切り花などの枝もの作物への転換を進行中。令和元年度までに、柚子5ha、ヒバ20haの作付を実施。

（2）今後の展開方向

①農地集積化・作業道確保について、さらに各農家の理解促進が必要。

［農地の集積化について］
分散錯圃のため、区画拡大するには各農家の理解が必要。そのために今後も話し合いを進めていく。また土地の勾配が激しいため整備には多額の費用がかかる。今後、他の事業などを活用しながら進めていく予定。

［作業道の確保］
着手できる箇所から進めているが、農地の区画拡大同様、茶業以外の農家の理解を必要とするため、引き続き話し合いを進めていく。

②茶工場の再編に向けた、さらなる検討と計画。

茶工場の再編には多額な費用がかかるため、当事業での実現は難しい。しかし今後必ず進めていかなくてはいけない課題である。国の事業の活用などで、引き続き検討・計画を進めていく。